

Kavli IPMU Arts Society

坪井あや つばい・あや

Kavli IPMU 学術支援専門職員

Kavli IPMU には Kavli IPMU Arts Society という団体があり、年に数回自主企画展示を行っています。その発起人の一人でもある筆者が、国内外のいくつかのサイエンス／アートの実例とあわせ、これまでの活動内容をご案内しましょう。

2013年の1月21日から2月28日にかけて、Kavli IPMU Arts Societyが企画運営した“Science and Everyday Life, Series 2, Masses & Sizes”展がIPMU 棟で開催されました。この企画は、教職員有志17名からの投稿画像58点の壁面展示、それに伴うパーティー、さらにその投稿画像を空間構成した（インスタレーション）展示、から成ります。まずは少し実際の投稿画像からご紹介しましょう（図1）。身の回りの画像と研究活動分野の画像とが隣同士に展示されているのがわかりになるでしょう

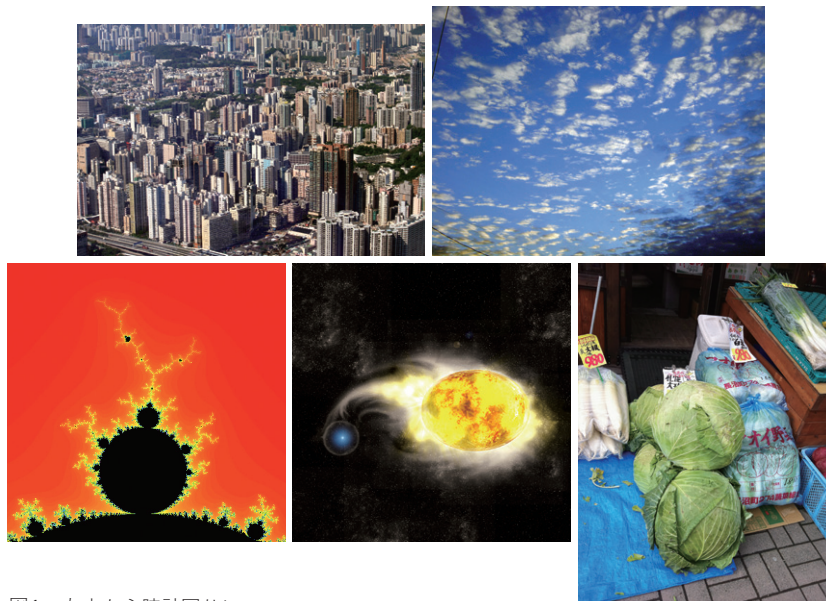


図1 左上から時計回りに Ivan Ip “超過密建築 香港”、Serguey Petcov “有限と無限”、小澤みどり “札幌地球”、野本憲一/Melina Bersten “黄色巨星”、河野俊丈 “マンデルブロ集合”（部分）

か。これら一見雑多なものが壁に一覧されると、不思議と何らかの関係性を発見できる点が面白味です。

この企画の背景には、どうしても出身国同士、専門分野同士で固まってしまうがちな研究者間の交流を促すこと、そして高度に専門化した学問と日常生活との間にできた深い溝に橋を渡そうという、野望に満ちた

意図が2つあります。展示会のたびに、テーマを設けて画像の投稿を募っています。初回のテーマは“パターン”でした。今回は“量—masses & sizes—”です。この展示会のポイントは、サイエンスの活動と日常生活の活動の双方を扱っていること。そして、用いるメディアに、言語ではなく、数式でもなく、画像を選択

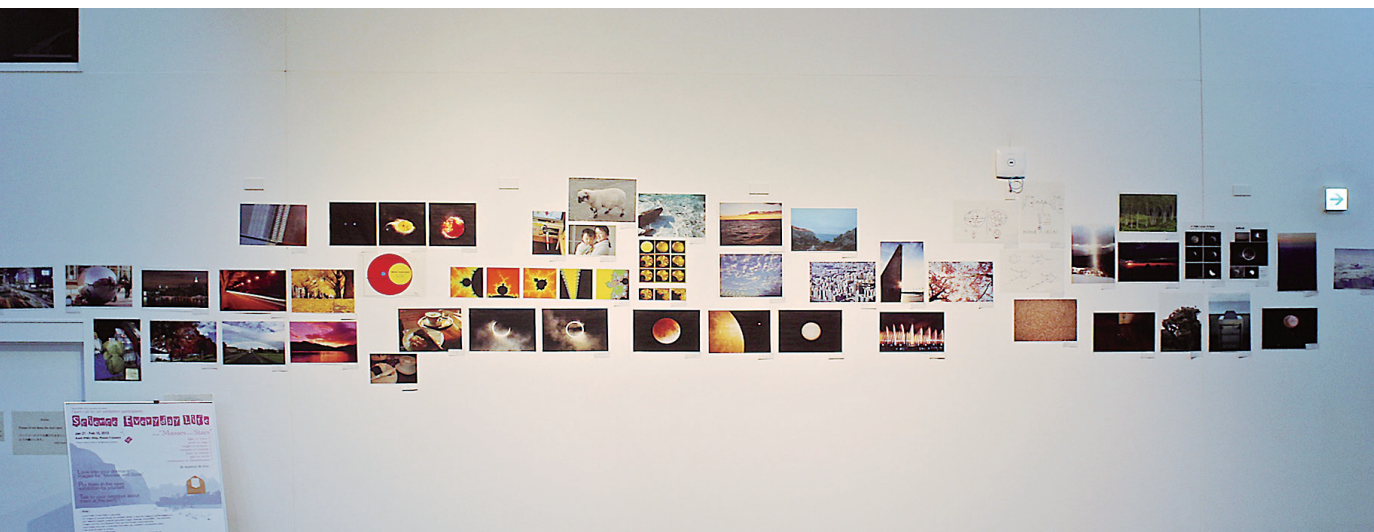


図2 壁面展示風景。最終的に17名58点の投稿で賑わいました。黒木WPIプログラムディレクターも特別参加されています。

していることにあります。強引な試みと思われるかもしれませんが、“形態”つまりはその見た目に注目するという手法は、例えば19世紀に「形態学」がありました。

実際の壁面展示では、投稿者自らが身近にあるプリンターを使って画像を出力し、規定のキャプションを付け、指定の壁に貼りだしています。第1回目の展覧会では応募のあった画像をArts Societyが出力し、展示を構成しましたが、より参加の敷居を下げることを期待して今回の方法を採用しました。告知当初は寂しい様相を呈していましたが、日々壁面の様子は変化してゆき、最終的には一面が埋まりました(図2)。会期中にはパーティーを開催。語らいを楽しむ多くの姿がみられました。毎日変化してゆく壁面という点が、研究者の興味をひいたのかも知れません。さらに空間構成した(インスタレーション)展示として、古くて使われなくなった iMac14台を、1Fのエントランス空間に構成しました(図3)。応募のあった画像に、“天体”、“光”、“フラクタル”といった9個の共通項^{*1}を見出し、各画像をそのカテゴリに振り分け、9種の映像にまとめました。各映像はそれぞれ iMac でループ再生し、関係の深いカテゴリの映像2



図3 空間に構成した(インスタレーション)展示風景。iMac14台で9種の映像と索引をループ再生しています。

台で1組のペアにして設置しました^{*2}(図4)。壁面展示には自分で関係性を見出す楽しみがありますが、こちらは暗示されるゆるやかな関係性から想起するのが面白味です。嬉しいサプライズとしては、同時期に開催されていた国際会議において、本企画を説明するセッションを設けていただきました。結果、背景を知らなかった多くの会議参加者の方にも楽しんでいただけたようです。

それではこの企画の具体的な楽しみ方をご紹介します。まずは、IPMUの隠れ写真愛好家(今までその存在を知られていなかった!)による美しい写真を愛でること、そして画像が暗示する“量-masses & sizes-”にまつわる概念^{*3}を推測してみる、パーティーに出かけて感想

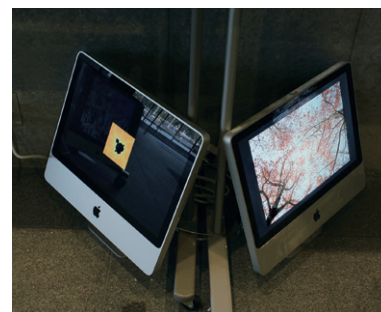


図4 1階展示風景(部分)。“フラクタル”(左)。“離散”(右)。

を交換する、壁面展示とインスタレーション展示との違いを考えてみる、などが挙げられると思います。もちろん画像を投稿し、自ら参加者になることで楽しみは倍増します。^{*4}

実施してみたところ、当初の目的は果たせたように思います。パーティーでは展示を眺めながらの会話が広がりました(図5)。また、展示を眺めて談笑していた研究者グルー



図5 パーティーの様子。ワイン片手に展示を見て談笑するメンバー。チーズを用意したが、「一瞬で消え失せた」とのことです。



図6 “Science and Everyday Life, Series 1, Pattern” 壁面展示風景。16名が投稿。

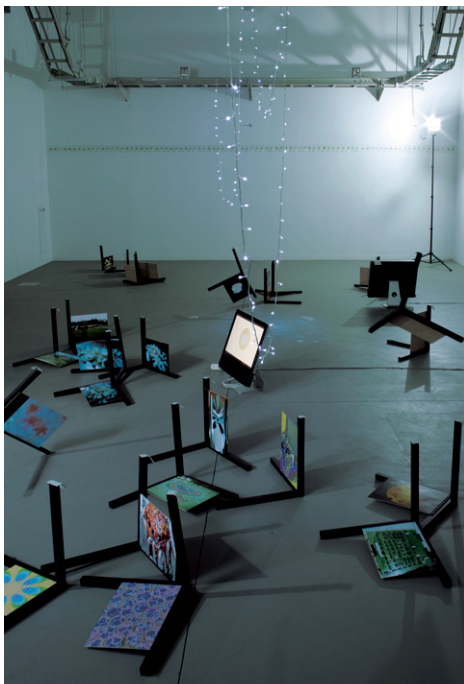


図7 (左) 同展、空間に構成した展示風景。約200m²。木片、ペンキ、紙、紙にインクジェット・プリント、iMac、プロジェクター、DVDプレーヤー、電飾、スタンドライト。
(右) XYZの3軸を表す木軸に画像とキャプションを構成し、関連の深い画像を近くに配置しました。

iMacとプロジェクターでは投稿映像を再生し、流れる時間とその方向を表すため電飾を導入しました。

ブが、そこから想起して研究の議論をはじめていたよ、という目撃談も寄せられています。

Arts Societyではこれまでもいくつか展示を企画しています。

- ・ “Science and Everyday Life, Series 1, Pattern”, 2011年3月–4月 (図6、7)
- ・ “Searching for the other physics

–an art exhibition at a science lab– vol. 02”, 2010年6月29日–7月11日 (図8)

- ・ “Searching for the other physics –an art exhibition at a science lab– vol. 01”, 2010年2月3日–27日

さてこういったIPMUでの試みはどのように位置づけられるでしょう

か？ここ数年来、サイエンスとアートが歩み寄る新しい潮流があるように思います。Arts Societyでの試みも、ささやかながらその流れに与するものであると言えるかもしれません。2012年の9月に数名の事務スタッフが米国の研究所を視察しました。充実したサポート・サービス体制と並んでアートプログラムの実施が目をつけたという報告を受けています。中でもニューヨークにある数理論理学研究所 Simons Centerは、組織内部にアートプログラムについての諮問委員会を持ち、施設内での作品展示、およびアーティスト・イン・レジデンスプログラム^{*5}等を定期的に行っているとのこと。他の例では、スイスにある素粒子物理学の研究所 CERN は、オーストリアで毎年開催されるメディアアートの祭典を主催する Ars Electronica と提携し、アーティスト・イン・レジデンス事業を2011年から始めています。

科学者自身が捉えるアートとの関わりはどのようなものでしょうか？2013年の理化学研究所の一般公開に、一風変わったコンテンツが提供されました。科学者同士が実際に議論を行っている、その現場を来場者に公開するというものです。「科学は創作活動であり、中身を全部理解できなくても、それを人間として感じることができる。芸術と共通の側面を持ち合わせている。」^{*6}というある物理学者の問題意識から企画されたとのこと。もう一つ。2010年からコペンハーゲン中心部にある映画館で Science & Cocktails というイベ

ントが実施されています。科学者による講演をカクテルと実験的な音楽イベント等と共に提供するという企画で、Niels Bohr Institute もその運営に携わるものです。オーガナイザの1人である物理学者はこう述べます。「芸術の新しい定義：一個人によるサイエンス。サイエンスの新しい定義：明確な境界を設けた芸術。双方に共通するのはその方法である：つまり、コンセプト/概念/現象を主観的あるいは客観的に記述しよう、そしてその正確さを1個人あるいは共同で保証しようという、終わり無き試み。」^{*7}

アートの側からのアプローチにも見るものがあります。ロンドンに、Central Saint Martins という名高い美術大学がありますが、2011年にその名も“Art and Science” 学科を大学院に創設しました。Art & Technology や Design Science の例は多くありますが、美術大学における Art & Science は大変新しい試みです。

これらの試みに共通するのは、いずれもサイエンス/アートを生み出す当事者の元で起きているということです。サイエンスをテーマにしたアート展が過去に美術館等で開催された例は多くありますが、それらは第三者により成果物が評価/提供される場^{*8} でした。サイエンス/アートを生み出す当事者が相互の枠組に身を置くことで、自らの活動を再定義しようという試みは、両者の分断^{*9}が顕著になるばかりだった近代以降では新しい傾向だと言えるでしょう。

サイエンス、アート、そのいずれも、そもそもは現在私たちが“真実”

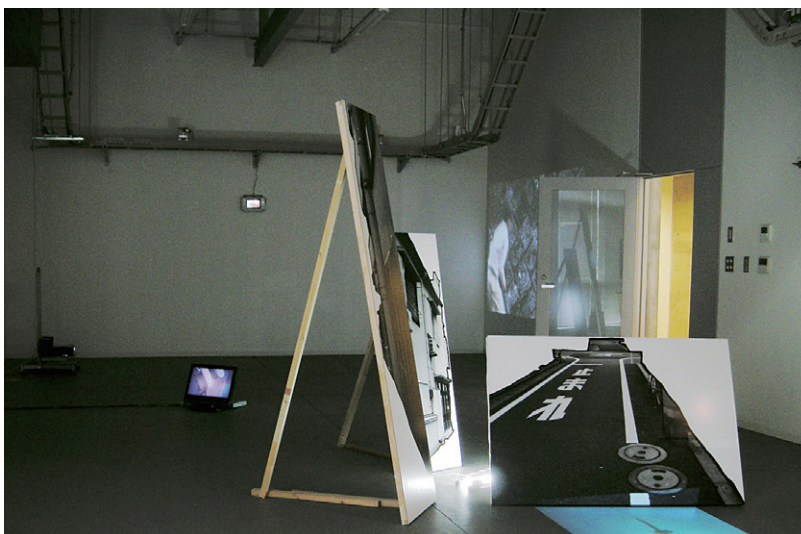


図8 “Searching for the other physics – an art exhibition at a science lab- vol.02” 展示風景。日英4名の若手現代美術作家による映像を中心としたグループ展示（筆者を含む）。一般公開も行いました。

や“知”と呼んでいる何かに何とかして触れたいという多様な試みの1つであったと言えます。しかし近代以降、サイエンスは巨大な成功を収め、その共同体だけで負うにはあまりに荷は大きくなり過ぎてきており、一方、アートは常に自らの定義を拡大し続けた結果、今やその本分というものを誰も見いだせなくなりつつあるようです。そんな中、筆者はここに再び“知”へとつながり得る新しい地平が姿を現はじめたのかもしれないと胸を躍らせています。

Kavli IPMU は数学、物理学、天文学で宇宙の謎に迫ろうという、あ

る種近代以前からの学を継承する試みと言えます。必然、芸術全般、哲学、美学等と親和性は高いと言えるでしょう。Arts Societyでは、他機関と協力することも視野に入れ、これからも様々なアプローチを継続的に試みること、Kavli IPMUの活性化に、延いては広い意味での“知”へ貢献してゆけることを願っています。

最後になりましたが、機会を与えてくださった村山機構長、中村前事務部門長、後押しして下さる事務スタッフの皆様、そして今回の国際会議オーガナイザの向山特任准教授に深くお礼申し上げます。

^{*1} 9箇の共通項は、“1つ”、“2つ”、“多数”、“天体”、“光”、“面”、“太陽”、“フラクタル”、“離散”。複数項目に属する画像もあります。

^{*2} “1つ”、“2つ”、“多数”についてはそれぞれ1台、2台、3台のiMacを用い、複製した映像を同期再生させました。

^{*3} “量-masses & sizes-”は、軽/重、小/大、1/多、不変/変量、有限/無限、部分/全体、連続/不連続、などにかみ砕けるでしょう。

^{*4} 残念ながら研究活動分野からの投稿が少なめです。“展覧会”と聞いて研究活動で扱う画像を投稿してはつまらないだろう、と躊躇う方が多いようです。しかしこの企画では、個々の投稿を楽しむことももちろんですが、様々なものが並列した様を一覧するのが面白味です。今後の増加に期待しています。

^{*5} アーティストが数ヶ月間滞在して現地で作品を制作しその成果展を行うものです。

^{*6} <http://d.hatena.ne.jp/D-brane/20130422>

^{*7} <http://www.jacomearmas.com/scicom.html>

^{*8} 近年では、国内外で、博物館のリソースを使用した博物館におけるアート展なども盛んです。

^{*9} 古代ギリシア期、同じ学の一部であったサイエンスと人文/社会科学は、特に近代以降各自独自の道を歩いており、当時のように近いことはありません。Artはルネサンス期にサイエンスとの距離を縮めたこともありましたが、人文/社会科学が扱う対象をもその対象とする現在は、人文/社会科学とサイエンスにあるのと同様の別離の一面があります。勿論、中世以降交流が皆無というわけではなく、近現代にサイエンスをインスピレーションの源として制作されたアートは多くあります。